

「晩秋の高尾山自然観察行(9)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

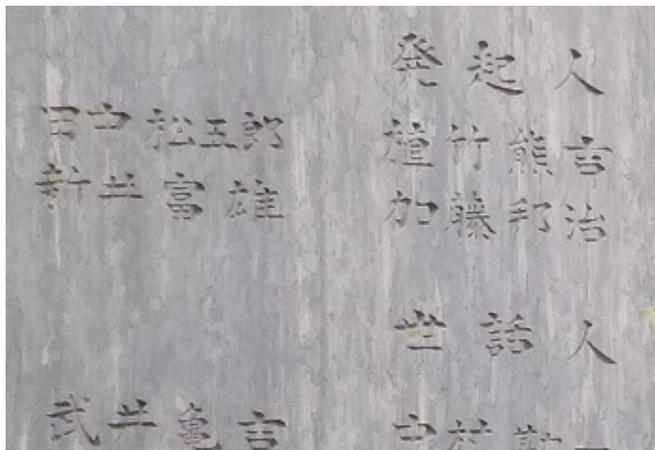
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

高尾山はいわゆる「霊山」の一つになっていて、集団で詣でる習慣がある。それぞれの集団は「〇〇高尾講」と称している。「富士講」と同じようなものだが、富士山よりもはるかに容易に登れる高尾山に登っても、富士山と同じご利益があるという考えである。現在約五百もの高尾講が存在するという。



高尾山の中腹にある「薬王院」で、是非見たいと思っていたものがあつた。それは「講の石碑」である。かつて各高尾講が、参道や山内に石碑を建てる習慣があつた。その中に、私の親戚が建てたものがあるのだ。その目当ての石碑は、薬王院の山門の近くに残っていた。「藤沢高尾講」と記されている。埼玉県深谷市の藤沢地区の高尾講が建てたものだ。



その発起人の筆頭に「田中松五郎」の名を見つけた。

田中松五郎は、私の「大叔父」にあたる人物で、「松やん」の愛称で親戚の中でも最も親しまれていた存在だった。ほかにも、私の知っている人物(父や祖父の友人)が何人か名を連ねていた。こんな場所で知っている人名を発見すると、嬉しくなるものだ。石碑はまるで「巨大な硯石」のような立派なものだった。粘板岩か黒雲母片岩か、恐らく長瀬あたりの石材だろう。



これが「田中家の一族」集合写真である。昭和 46 年の私と同じ年の従妹の七五三の時で、中央右の破魔矢を持っているのが私(7歳)。上段左端のカメラをさげた男性が父、中段左から3番目が母、中段右端の頑固そうな男性が高尾講の発起人「田中松五郎」である。田中家は長寿の多い家系で、両親を含め、この写真に写っている者の多くは、まだ健在である。



ここまで来て、「晩秋の自然観察」はほぼ終了・・・でもよかったのだが、予定よりも早く行動を開始したので、まだ時間に余裕があつた。昼食にはまだ少し早く「せっかくだから山頂まで行きましょう」ということになった。薬王院の標高が 520m、山頂が 599m なので楽勝なのだが、しばらくは急登の石段が続く。